

お正月

田中藤穂

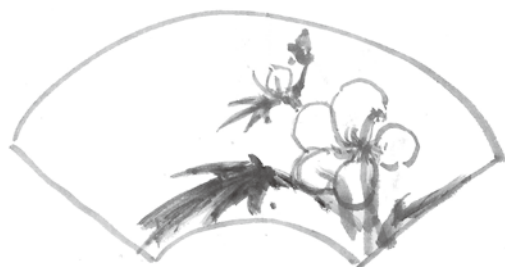
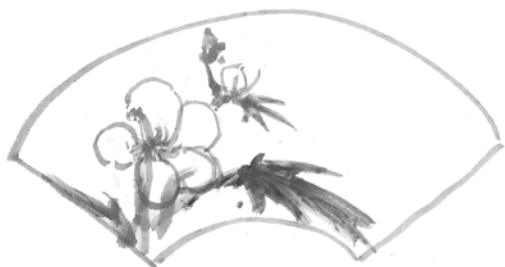
正月や兄どこからか出てきさう
夫在らぬ正月のはや二十年
冷蔵庫に食料いっぱいお正月
曾孫たちスキーに夢中といふ電話
さよならの年となるかも暦替ふ



初景色

長崎桂子

初茜二階の窓に合唱す
年重ね吾が郷の海初景色
初景色行交ふ車少なきや
隣人と堅い挨拶初景色
怪我もなき今日を願ふや雪安居
積雪十五センチ四度おそひ来し
肩窄め七種粥や願ひ込め
固い土持ち上げ物芽いと愛し



雑詠

森なほ子

日陰りてたちまち居間のうそ寒し
節分の一句得ざるは鬼のせひ
隣家より偏屈爺の「鬼は外」
明日よりは春の鳥なり寒鳥
立春や鶉の啄む昨夜の豆
千の蕾咲かせてみたしブロッコリー
バレンタインデー引いて馬鈴薯古歳時記



お正月

赤座典子

新玉の祝詞LINEで次々と
坊主捲り孫に教はる二日かな
松過ぎて絵馬はなやぎを残しをり
訪ひし子に鍋の締めなる寒卵
コロナ禍や籠り続けて去年今年



二年振り

秋川 泉

元旦や挨拶に来る茶トラ猫
寒風に負けじと歩く前かがみ
小さくて皿にのりさう寒の月
探梅や茶トラも三毛もついて来る
寒風にさらされながら話し込む
冬帽子の友走り来る二年振り
二年振り笑顔少しも変わらずに
二年振りブラックチョコの寒見舞

晦日より三日まで

大日向幸江

懸命に生きる猫の子拾ひけり
二匹めは初めましてと顔を舐め
いつまでも泥鰯ほしがる二匹めや
喪中なの呟く友や酒あおり
大酒を飲んだ友去る晦日かな
新酒持ち友来る二日化粧せず
はや三日大学マラソン見損ふ



初写真

七郎衛門吉保

いつもない玄関に花年迎ふ
黒髭にビンゴに歌留多初写真
寅年にあはせトラ焼き年賀客
初夢や干して枕の丁度良き
念を入れ両手両足つき初湯
あれやこれ賽銭足すや初詣
半世紀過ぎても北風の基地の街
咳一つ図書館の席一人置き

五黄寅歳

篠田純子

吾と息子五黄寅歳初神籤
初詣口開け見入るマルベル堂
ルーペもて源^げ氏^ん物語^じ原文夜の長し
新刊の明朝体のウロコ冴ゆ
着膨れてアンドロイドの動きせる
亀鳴くや良妻賢母を教えられ
初烏わつはあはあと銀座路地



高速進行

篠田大佳

臨時列車高速進行雪時雨

雪しまく夜行列車の立往生

降る雪や銜学の士の独りごち

語り合ふ友なく雪は舞ひ上がる

汽車往くや孤独の人は雪を見る



一月号作品より

篠田純子・篠田大佳・佐藤喜孝

買ってきし蓮根に芽ありだうしやう

佐藤竹僊

蓮根の芽は、サラダにしていただと甘くて美味しいそうです。芽の断面はミニサイズの蓮根で可愛い形とか。農家さんのある地域に引越されたので、いろいろ珍しい野菜に出逢う体験をされているようです。新鮮な驚きが「だうしやう」に現れていて楽しい表現だと思います。(純子)

初夢に出てきて欲しき水見るひと

佐藤竹僊

「水見るひと」にはモデルがいると思われませんが、読者がそれを知るために、作者より与えられたヒントが「水」です。占いでは、水は秩序的であったり静的なイメージです。あるいは水道事業や水運や治水などの職業かもしれませんが、彼らも水の流れを読む仕事です。水は全てを見通す人というイメージを導出し、道導を欲している様子を想像します。(大佳)

事故ありて花壇のかから輝けり

篠田大佳

全きものが壊された驚き。交通事故であろうか。それは花を護っている花壇である。傷つけられた物の内部や、破片が曝され輝いている。死を暗示させている句と思った。(純子)

そぞろ集まり放課後の暮易し

篠田大佳

小中学の話では無ささう。高校の放課後のやうすのやうだ。暮易しは日短・暮早しと同義だが作例は少ないやうだ。「そぞろ集まり」といひ「暮易し」などと雅な言葉を使ふ志向の生徒の集まりか。気心の知れた仲間との会話はいかほど楽しいことだらうか。(喜孝)

時々ナビを無視して冬の旅

須賀敏子

GPSを用いたナビはとても便利で、ナビの言うことを聞けば、無難な旅を送ることができます。しかし、無難な旅だけでは物足りません。時折刺激を求めて寄り道したくなる旅の浮気心に、共感しきりです。(大佳)

冬の陽のぬくもり両手にて受ける

田中藤穂

冬の陽は淡く弱々しいイメージです。光が弱いと、体も気持ちも鬱々としてしまいます。幸運にも降りそそいだ光をこぼさぬようにという動作に、心身とも作者の切実さが現れています。ぬくもりを受け取る切実さを持ち続ければ、殺伐とした世界にも優しい光が注がれることでしょう。(大佳)

爽やかや少々五体かたくなり

長崎桂子

さわやかな季節感に、眠りが少々深くなった作者を想像します。暑い時期に体を動かして解れていた体を涼しくなって再点検したら、ちょっと動きが固く感じられたと読みます。適度な労働を続ける作者の生活が見えてきます。(大佳)

席一人分の権利とホットティー

森なほ子

カフェーでいくら払う飲み物代を言語化すると、掲句のような内訳になります。言語化することで、日頃考えもしなかったことが新たな発見されて驚きがあります。サーブとは何か。そんなことを考えさせられます。お金の価値について再考する時だからこそ一層、掲句は読者の考え方の幅を広げてくれます。(大佳)

シニヨンに銀のひとすぢ小春風

赤座典子

お団子頭というと男性にも理解が早いですが、シニヨンに結った髪にちらりと見える銀のヘアピンをズームして、小春風がシニヨンに吹いています。ヘアピンの銀色は銀髪に合わせた色合いです。銀色のヘアピンの輝きが小春に映え合います。(大佳)

陽水をAJICOがカバー冬の月

秋川 泉

AJICOは、テレビ番組で井上陽水氏のレパートリーから「リバーサイドホテル」をカバーし

たようです。浅井健一氏のグレッチギターの弦の振動から、冬の闇に月と電飾に淡く灯された妖艶なナイトプールが浮かんできます。ロックンロールを俳句に翻案することは難作業が伴いますが、掲句は特に作者の感動を大事に読みたいのです。(大佳)

この朝に初冠雪の富士を見る

大日向幸江

病中の連作より、富士山が見えたとの作者です。「この朝」の感情に対する想像の幅は広いですが、いい気分ではなかったことを想像させます。病中、不意に見えた希望は心に残り、何度も人間の力強さを思い出させてくれます。(大佳)

今宵また殿様になる干蒲団

七郎衛門吉保

布団を干した日は布団がふかふかになり、殿様のような気分を味わう作者です。布団のふかふかの楽しさを殿様に返り咲いたような高揚感として諧謔にした句と読めます。布団が硬くなると居城を明け渡し、天気の良い日に布団を干すと、また居城に帰ってくる波瀾万丈さです。(大佳)

秋の苑地を行く鷺とすれ違ふ

篠田純子

鳥と地面ですれ違う経験は滅多にないことです。野生の鳥は人間を警戒して空を飛んでしまうことがあります。一方で、公園を縄張りに行っている鳥は、溜まり場で知己とすれ違う気軽さですれ違

うことがあります。掲句の感動は人の少ない場所と時間帯で、しかも、ほぼ野生であろう鷺となれば、相当貴重な経験でしょう。(大佳)

インバネス七郎衛門吉保ぞ

篠田純子

純子さんは挨拶句をよく作られる。この句は句会で初見した。多くの人に分かって欲しいと作る句と、ある一人にだけわかってもらへれば目的達成といふ句もある。後者のひとつに悼句があるがせんないことだ。この句は後者の句に近い。「七郎衛門吉保」といふ固有名詞と「インバネス」でしっかり伝はる。このやうな挨拶句は悼句より百倍もいや千倍もよい。一月・二月号の拙句は会員名の一字をかりて遊ばせていただいた。(喜孝)

